北垣国道銅像

琵琶湖の水を利用して物資を運び、京都の産業を興そうという計画は、江戸時代からたびたび計画されていました。それが実現したのは、近代になってからの京都府の施策としてであり、その時の知事は北垣国道（きたがきくにみち）でした。

大津の三保崎（三井寺の近く）から京都粟田口の蹴上まで引かれた運河は、琵琶湖疏水と呼ばれます。1885 年（明治 18）8 月から 1890 年（明治 23）　4 月まで、約 6 年近い歳月をかけて工事が行われました。当時の工事の様子は、河田小龍により「琵琶湖疏水図誌」として 3 巻の絵にまとめられています。また、工事の記録は京都府の行政文書の中にも残っています。

工事の推進者である北垣国道を顕彰する銅像は、1902 年（明治 35）に疏水の夷川船溜の西畔に建てられ、11 月 9 日に除幕式が行われました（『京都府百年の年表　1 政治・行政編』）。その紙焼き写真が石井行昌撮影写真資料にあります（No.103）。洋装をした立ち姿の像で、左手には図面（疏水測量地図）を持っています。台座には京都市参事会により顕彰文が書かれています（『京都府誌』下巻に全文掲載）。この像は京都で最も古い銅像で、東京美術学校の白井清次郎の原型をもとに京都の鋳造家平野吉兵衛により造られました(『京都日出新聞』明治 35 年 11 月 10 日)。

写真をよく見ると、銅像を囲むように飾りが見えます。石井行昌撮影写真資料（乙）の No.128 には、写真アルバムに同じ写真が貼られていて､「明治 35 年 11 月 10 日　銅像除幕式の翌日　午前 9 時撮影」の書き込みがありました。これにより、当時の写真としては珍しく撮影年

月日が明らかになるとともに、銅像を囲む飾りが除幕式に関係するものであったことがわかります。この写真からも、石井氏が新しもの好きであったことが想像されます。

※なお、写真の銅像は戦時中に金属供出されました。現在の北垣国道銅像は、1990 年（平成 2）に再建されたものです。

（2018 年 5 月 11 日公開）